

巻頭言

個性

Individuality

藤原 正彦

Masahiko FUJIWARA

「個性尊重」が、最近二十年ほどの教育の根底にあるようだ。詰込み教育への反省もあって、このモットーは一気に教育界に浸透した。「ゆとり教育」もその中から生まれた。学校だけでなく、家庭にも浸透した。美しい言葉であるだけに、またたく間に我が国を支配した。

現在三十五歳以下の日本人の多くは、学校と家庭で個性を十分に尊重されてきた人々である。はたして個性は育ったのだろうか。

今の学生を私の学生の頃と比較して、個性的なのは外観だけである。当時の男子学生の大半は、黒の学生服を着ていた。女子学生の定番と言え、紺のスカートに白いブラウスだった。キャンパスでよく見た歌手の加藤登紀子もそうだった。今の学生に定番はない。六月の今、私のゼミの学生には、ジーンズ、スラックス、ミニスカート、ヘソを出している者や、何故かジーンズの上からスカートをはいている者もいる。髪や履物も様々である。

一方、中味の方はどうだろうか。こちらに見るべき個性はほとんど感じられない。なべて時流に流されている。だから、日本は侵略を行った恥ずかしい国である、と思っている人々には、「侵略を行わなかった有力国を一つでも挙げよ」と言う。封建時代の女性は抑圧されていて不幸だった、と思う人には、「山川菊栄の『武家の女性』を読みなさい」と言う。特攻隊員は軍国教育で洗脳された気の毒な青年達、と思う人には「『聞けわだつみの声』を読みなさい」と言う。

自由が何より大切と思う人には、「あなたが自由を貫き気ままな生活をすれば親は怒って仕送りを中止するでしょう。あなたは学資のためバイトに精を出すことになり、勉強する自由も遊ぶ自由も失います」と言う。「民主主義こそ理想」と思う人には、「国民が未熟で判断力がないと、民主主義は国を滅ぼしますが」と言う。

個性を尊重などしては、学問や善悪の基礎基本を叩き込むことがむずかしい。基礎基本がしっかりとしていないと創造的に考えることができない。権威やマスコミの言葉をうのみにするようになる。個性を尊重した結果、個性は滅びつつあるようだ。

(お茶の水女子大学附属図書館館長)